

【書評論文】

社会変化下で繋がりを構築する人々——  
マレーシア半島部オラン・アスリの事例から

信田敏宏著『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から  
助け合いの人類史へ』（臨川書店、2021年）

河合 文

はじめに

本書はマレーシア半島部（以下、半島部）の先住民オラン・アスリ（Orang Asli）の家族・親族関係を中心に、非政府組織（Non-governmental Organization：NGO）との交流を含めて、人々の「助け合い」や「分かち合い」の関係について考察するものである。構成は「はじめに」に続く6章と「おわりに」、そして「世帯の記録」と題したドリアン・タワール村63世帯の詳細な記録、末尾に参考文献とあとがきとなっている。第1章と第2章はオラン・アスリの概要、第3章は調査地ドリアン・タワール村の説明に充てられ、第4章と第5章では家族や親族関係に焦点を当てたドリアン・タワール村の歴史と日常生活の記述と分析が行われる。そして第6章は村の人々とNGOの付き合いを基にした社会関係の記述と分析、最後に「おわりに」においてNGOを含めた人々の関係性が「助け合い」や「分かち合い」という観点から考察されている。

I 本書の概要

著者は2017年、ヌグリ・スンビラン州ドリアン・タワール村の結婚式に参加した際に、人々の家族の在り方や親族の繋がりが調査を始めた約20年前と変わらないことに思いを巡らせる。しかし同時に、親族以外に助けを頼める相手が存在しなかった彼らがNGOの支援を受けつつ外部権力との交渉を試みるなど、身近な関係を越えた新たな繋がりが構築されていることにも着目する。そこから、オラン・アスリにとっての家族、親族を中心に据えつつ、NGOも加えた人々の社会関係について考察するという目的が「はじめに」で示される。

第1章「オラン・アスリの概要」では、オラン・アスリが「土地の人」や「元々の人」を意味し、プミプトラとよばれるマレー系の諸民族に含まれると説明される。半島部の広域に暮らす18のグループ（suku kaum）がオラン・アスリに属し、身体的特徴、生活環

境や生業、言語に基づき、ネグリト、セノイ、ムラユ・アスリという3カテゴリーに分類される。多くがマレー語とは異系統のモンクメール系の言語を母語とするが、ムラユ・アスリ系集団の大半はマレー語とよく似た言語を母語とし、マレー人と文化的連続性がみられると説明される。こうして多様性がありつつもオラン・アスリはマレー人ではないという点を共通項とするだけでなく、貧困層に位置付けられ遅れた人々とみなされる傾向にあり、外部とのやり取り等を通じて彼ら自身にもオラン・アスリという自意識が芽生えつつあると概説される。なお著者が対象とするのはムラユ・アスリ系のトゥムアン (Temuan) というグループである。

第2章「オラン・アスリの歴史」では、どのような人々がいかにオラン・アスリとカテゴライズされるようになったのか、また彼らが独立後どのような状況におかれてきたかが説明される。第二次大戦後、マラヤ共産党が反乱を起こした非常事態宣言期にアボリジニ法が制定され、「アボリジニ」が法的に定義されて奥地に暮らす人々へのマラヤ連邦政府の介入が始まった。著者は、これによって地域毎に様々な名称で呼ばれていた人々がアボリジニとしてまとめられただけでなく、彼らがマレー人とは異なる民族として生き残ることになったと指摘する。そしてマラヤ連邦独立後、とくにマレーシア結成後に進められた開発やイスラーム化政策の下、彼らは国家のマイノリティとして自らを意識するようになり、サバ州やサラワク州の先住民とも「開発の犠牲者」として連帯しつつあるとする。

第3章「ドリアン・タワール村の外観」では、ドリアン・タワール村の概要が「上の村」と「下の村」の差異やここ20年の変化に触れつつ説明される。63世帯より成る村は小高い丘に位置する。人々は奥地で移動しながら狩猟採取生活を送っていたが、100年程前に一部の人が森から出てきて水稲耕作を営むようになり、森に残っていた人々も後に丘の下で生活を始めた。彼らは定住化と農耕民化の過程でマレー人の慣習法アダット (adat) を受容し少しずつアレンジを加えてきたが、近年はマレー的要素を除いてオラン・アスリ的なものを加える変化がみられるという。さらに上の村には公務員や教師として村外で働く人が増え、SNSの利用も増加し特に若い世代の意識が変化している。「下の人々」には、貧しく健康状態の悪い人が多く心の拠り所を求めるキリスト教への改宗者が増加しているそうである。

第4章「制度としての母系制、理念としての母系制」は、親族に関する理念と実践、それらの変容を取り上げる。村の人々は核家族を生活の基本単位としているが、母系の血筋・系統を同じくする人々をプルット (perut) と呼ぶなど母系親族限定の親族語彙が存在し、妻方居住が理想とされ、実践レベルでも母系が選好される。そして著者はエマニュエル・トッド (Emmanuel Todd) の伝播論的モデル (トッド, 2016) を参照し、双系制を原型としていた東南アジアに母系制が出現した経緯を説明する。そのうえで、調査地域には17世紀ミナンカバウ人の移住と共に母系制が導入され、ビドゥアンダ (Biduanda) と呼ばれていた人のうち一部は他集団と通婚しムスリムになり、彼らは半島部の国民登録が進むなかでマレー人に、残り的人々は非ムスリムのオラン・アスリになったと説明する。これら非ムスリムの人々は双系制を維持し、村の近くの森で移動生活を送っていたが、彼らの

リーダーの妹(または姉)の夫であるマレー人のシウトゥン(Siuntung)がバティン(batin)という村のリーダーになったのを契機に森から出て水稲耕作と定住生活を開始した。同時に親族的紐帯が結ばれた近隣マレー農村の生活に近い暮らしを営むようになり、土地所有や相続においてマレー人が実践していた母系の方法が導入されたそうである。

さらに1970年代以降は新たにバティンの役についたジャングット(Janggut)の下で「母系アダット原理主義」の動きが生じた。不動産を女性の名義にするなど母系アダットの理念を強調する形で開発プロジェクトが導入され、土地の相続や結婚も母系の論理が優先されるようになったそうである。著者はこの動きを、華人を父にもつジャングットがオラン・アスリの系統をもつ母方との繋がりを強調したことや、息子より母系親族の年少者を頼っていたことと関係すると分析する。また母系が強調されながらも称号は男性が保有し、称号保有者は特権的に夫方居住が許容されている点が政治的不安定を招いていたとも指摘する。

5章「家族の諸相」では、結婚と結婚後の居住形態に触れつつ夫婦関係と民族関係が考察される。妻方居住の場合は女性優位で、父親は子どもに優しく躰は母方のオジが行い、男性は姉妹を大切にし女性も兄弟を大事にする一方、夫方居住は称号保有者や耕作地のある夫の村で暮らす夫婦にみられるという。さらに双系制を実践する人々にもふれ、双系制の実践は個々の価値観が表れているようなもので強制力は強くないと説明し、母系のアダット、双系的な親族関係、父系的な一夫多妻など起源の異なる制度が絡み合っただけで家族の在り方を形づくっていると論じる。

また民族の枠を超えた結婚の事例も示される。華人を父にもつバティン・ジャングットは町の華人コミュニティで育ったが、戦争の開始をうけて母の故郷であるドリアン・タワール村に避難して暮らすようになり、マラヤ連邦独立後にオラン・アスリ名に改名して国民登録した。ムラユ・アスリには彼のような系譜の人が少なくなく、華人と結婚し町で暮らすオラン・アスリ女性や、マレー人と結婚しマレー人コミュニティで生活する男性も存在するという。しかし村で生活するムスリムになったオラン・アスリは、村の集会で食器を別にしたり埋葬地が異なったりと、村のなかにいる「マレー人」の様になるという。一方初期のバティンであったマレー人のバティン・シウトゥンはイスラーム礼拝を欠かさないながらもバティンの役目を果たしたということから、宗教とエスニシティの関係は個人や時代によって様々であることが分かる。

6章「NGO活動によって築かれる新たな関係性」では、NGOとの交流を通じた人と人の結びつきや彼らのアイデンティティの認識について論じられる。村ではそれまで廃れつつあった歌と踊りが半島部マレーシア・オラン・アスリ協会(Persatuan Orang Asli Semenanjung Malaysia)というNGOの集会で披露されたのをきっかけに注目され継承活動が活性化するなど、NGOとの繋がりが伝統文化を見直す契機や他民族との交流をもたらした。またサバ、サラワクの先住民との交流も生まれ、こうした他地域出身者との結婚もみられるようになっていく。先住民としての権利や土地権の問題、ビジネスや大学進学などの情報交換もNGO活動を基に形成された繋がりが活用されているという。そして著

者は、NGOは個人の繋がりを基盤としたネットワークであり、そこに組み込まれることで助け合いの関係が構築されると論じる。

さらに「おわりに」で著者は、ドリアン・タワール村の親族システムは誰かが排除されるような一系的な関係ではなく、状況に応じて人々を結び付ける双系的原理を基盤とする原初的なシステムであるとトッドの議論を参照しつつ論じる。こうした原初的なシステムが基盤にあることが、村の人々の助け合いや分かち合いに関係しているという。そして、家族や親族の繋がりを頼りにしてきた彼らは、国家による大きな圧力の下でNGOとの交流を通じて新たなネットワークを築きつつあるとまとめ、村内の関係だけでなく、こうしたネットワーク、グローバル支援へ目を向けるために「助け合い」や「分かち合い」という観点からの研究の展望を述べる。

## II 本書の位置づけと貢献

### 1. エスニシティと民族にかんする理解

マレー人、華人、インド人、アボリジニというように、半島部に暮らす人々は植民地時代より異なる人種や民族として行政的に把握されてきた。そうした民族間の力関係が意識され特別な扱いや固有の権利を求める際に主張されるエスニシティは、個々の民族は遥か昔から別々であったというイメージをまとうことが指摘されている (Eriksen, 2010[1993])。この点でエスニシティと民族は区別する必要がある、オラン・アスリについても同様である。非常事態宣言期、政治的な思惑の下でオラン・アスリと定められた人々は、保留地での生活を強いられるなどマレー人とは異なる民族としてマレーシア社会に位置づけられてきた。そして特に1990年代以降、オラン・アスリと定められた人々はマレー人との差異を強調し自らのエスニシティとして示すことで地位や権利を獲得しようと運動を活発化したため、その側面がとかく注目されるようになった。社会的にも、また一部の研究者によっても、オラン・アスリはマレー人とは明確に区別される民族であると捉えられ、オラン・アスリとマレー人のどちらが本当の先住民かという議論もなされた。しかし本書が示す、ビドゥアンダと呼ばれていた人々がマレー人とオラン・アスリに分かれたという事実や、マレー人がオラン・アスリと結婚しオラン・アスリの村のリーダーになったという事例は、そうした視点を相対化し政治的に示されたエスニシティをそのまま現実理解に用いることを留まらせる。

また筆者は、同じ村で生活していてもムスリムになった人々はマレー人のようだと指摘しつつ、そうした人々も村の行事に参加するという現代社会の複雑さも記述する。民族の枠を超えた結婚やこうした村内の「他者」に関する分析は、行政的な民族カテゴリーを用いる形で示されたエスニシティが実態と必ずしも合致するようなものではなく、多層的な社会の分析と文脈に合わせた考察が必要であることを再認識させる。多民族社会マレーシアにたいする見識を深めるだけでなく、そうした社会に生きる人々を理解することの難し

さと重要性を示すものである。

## 2. 「オラン・アスリ」と「トゥムアン」

著者が対象としたのはオラン・アスリのトゥムアンというグループである。先述のようにオラン・アスリは18の集団を含み、生活環境や暮らしは一様ではなく、なかにはマレー人と日常的に交易してきた集団も存在する。しかしそうだとすると、国家的なカテゴリーが制定されそれに基づく統治が行われる以前も、諸集団の境界が維持されていたのは何故かという疑問が生じる。この点について先行研究では、婚姻形態という点より説明されてきた。それによると、半島部に暮らす人々が個々の生活環境に適応する形で狩猟採集や移動農耕、定住農耕といった経済活動に特化していく過程で、それぞれに婚姻形態や男女の関わり方にかんする規則が確立されていき、それによって親族関係が築かれる相手が限定され、一定の境界をもつ集団が形成されてきたという (Benjamin, 1985)。

例えば半島部に暮らしてきた諸集団のなかでも、定住農耕と外部社会との交易を組み合わせた生活を営んできた人々の間では妻方居住が採用され、子の出自を母系で認識する傾向があり、これはドリアン・タワール村と同様である。このような選好の背景には、農耕上の協働作業に女性のネットワークを活用でき、外部社会との交易を男性が担当することが関係すると論じられている (Benjamin, 1985)。しかしドリアン・タワール村の人々はオラン・アスリのなかでもトゥムアンというグループに属する。そしてトゥムアンの多くは森の資源の採集を主生業とし、1か所に定住しない生活を送り、居住形態における妻方・夫方の選好や子どもの認知は多様であったという。この点をふまえると、ドリアン・タワール村のトゥムアンは、森で移動しながらの生活から水稻栽培と定住生活に移行するのに伴い母系制への選好を強めたと理解できる。つまりドリアン・タワール村の歴史は、人々が以前とは異なる経済活動を営むようになる過程で新たな実践を選択したことを示しており、生業と親族システムの関係を考えるうえで重要な事例である。そして、トッドのように親族システムの起源や歴史的变化を伝播論的に扱う立場にも、集約的な農耕の伝播と親族システムの関係という観点からの分析枠組みを提供する。

けれども著者は、移動生活を送っていたトゥムアンが定住農耕へ移行する過程で母系の傾向を強めた事例としてではなく、18もの多様な集団を含むオラン・アスリの家族・親族の研究として提示する。本書とは全く異なる親族関係を築くバテツというオラン・アスリの1集団を研究してきた評者は、本書の議論がオラン・アスリの家族・親族の研究として代表性が担保されるのかという疑問を抱いた。しかし、そうした問いが的の外れで著者の意図は別のところにあったとの見方に至った。おそらく著者は、ドリアン・タワール村の人々のあいだに新たに生じている関係、特に先住民ネットワークやNGOとの繋がりを含めて考察するためにオラン・アスリという語を用いたのだろう。婚姻形態によって集団間の境界が形成・維持されてきた人々も、以前とは異なる社会的紐帯を形成しており、そうした繋がりと助け合いの社会実践を描くことが目的だったのだろうという見方も成り立つ。

### 3. 「繋がり」への着目

こうした繋がり (relatedness) への着目は、近年の家族・親族研究の流れと一致する。人類学における家族・親族研究は、ルイス・ヘンリー・モーガン (Lewis Henry Morgan) の『古代社会』のように親族名称を手掛かりにしつつも血族と姻族という、当時の生物学的概念を前提とした西欧社会中心主義的な観点から始まった (Morgan, 1985[1877])。世界の人々の親族関係と婚姻形態を出自に着目して、父系出自集団、母系出自集団といった形で類型化し、進化論的に論じたわけである。その後様々な進展がありつつも「自然」な血縁関係を当然視し、血縁と婚姻以外の形で築かれる親族関係を特別なものとして論じる傾向があった。しかし近年は対象社会の変化だけでなく、生殖医療技術の発展、同性婚の出現、さらに臓器提供者の家族とレシピエントの間に形成される「母」や「息子」と呼び合う関係、といった自らの社会における変化を受けて、人々が実際に生活のなかで築く関係を「生物学的血縁」に規定されない形で対象化する方法を模索する流れが生じている。

そのなかに、人々の主体性に着目しつつ親族関係を理解する方策として「繋がり」という観点から理解を試みる立場がある (Lavenda and Schults, 2020; Parkin and Stone, 2004)。本書はマレーシアのオラン・アスリという先住民を対象としながらも、この潮流に新たな知見をもたらすものであり、特に NGO 等の助け合いという形で結ばれたネットワークが新たな血縁関係を作り出す結婚に繋がっている点、またオラン・アスリというアイデンティティの認識に繋がっている点で興味深い。そうした状況でマレー農村の近くに暮らしてきたトゥムアンとしての親族関係がいかに調整されているのか、新たな繋がりや地域内の付き合いや親族関係にどのような影響をもたらしているのかといった点においても今後の展開が期待される。

### 4. 社会の変化と「結婚」

また繋がりへの着目は、婚姻同盟の理論 (縁組理論) を新たな方向へ発展させた流れともいえ、この点でも本書は重要な観点を提供する。婚姻同盟にかんする議論は、それまで出自に着目して類型化して論じられていた集団間の関係を焦点化し、集団を結び付ける婚姻のもつ社会統合機能に着目したものであり、婚姻に伴う財のやり取りを分析に含めたり、婚姻を女性の交換と捉えて考察したりすることで、婚姻が集団間の連携を強化し諸集団の統合に寄与することを明らかにした (e.g., Levi-Strauss, 1969[1949]; Needham, 2011[1971])。本書でドリアン・タワール村の人々が森を出て農耕を営み、母系的な傾向を強める契機となったマレー人との婚姻 (と彼がバティンになったこと) も、こうした集団間の連携という観点から考察することが可能だろう。

しかしその後、ドリアン・タワール村の人々はオラン・アスリとしてマレーシアの歴史を歩んできたのであり、彼らとマレー農村のマレー人との親族関係が完全に途絶えたのか、それとも何らかの紐帯が維持されているのかは気になる点である。なぜならこれは、

国家的な民族の制定や政策の実施が、婚姻による結びつきを凌駕する影響力をもつか否かという議論にかかわるためである。なお本書の事例では、男女が国家的民族枠組みの境界を超える形で結婚すると、それぞれマレーヤオラン・アスリ、華人などという居住地のエスニック・コミュニティ内で生活するようになり、さらに次の世代ではその傾向が進むことを示している。これは、現在のマレーシアでは、学校教育といった国家制度や政策の影響を受けるためだと評者は考える。

また、本書で「婚姻」でなく「結婚」という語が用いられていることも、こうした人々の実践の意味合いが変わりつつあることを示している。「婚姻」と「結婚」のどちらを使用するかは、ある男女の行為が親族間の関係として意味づけられるのか、或いは特定の家族間の関係として意味づけられるのか、もしくはより個人的なものとして認識されるのかという変化（研究者側も含め）を反映していると考えられる。この2つの語は共に漢語由来で平安時代には使われていたが、結婚という語が日常語として定着したのは明治時代だという（日本国語大辞典第2版編集委員会, 2002）。「結婚」は「結婚する」というように動詞として使われる一方、「婚姻」の動詞的使用は一般的ではなく法律等社会制度との関係で使用されることが多い。つまり「結婚」は個人的あるいは小規模な家族間の行為に対して、「婚姻」はより社会の側からみた実践や親族間の関係を示す場合に使用される、というように文脈や強調したい側面によって使い分けがなされている。

これまで社会や親族と関連付けて「婚姻」という語で記述されてきた行為に「結婚」という語が充てられる事例が増加しているのは、人類学者側の認識の変化に加えて対象とする人々の変化が関係している。このような流れで考えると、ドリアン・タワール村の人が他地域の先住民と夫婦になることでそれぞれの親族の間に新たな紐帯が形成されているのか、それとも家族や親族の特定個人のみとの繋がりに留まっているのかという記述が含まれていたら、家族関係、親族関係と先住民ネットワークの性質にかんする議論に繋がり、社会変容といった側面も考察できたと考える。

## 5. 原初的システムと母系制

「おわりに」において著者は、トッドの議論を参照しつつ、ドリアン・タワール村の人々の関係は成員を包摂的に結びつける原理を基盤とする原初的な社会システムであると述べ、母系制の影響は表層的であるとまとめる。しかし4章と5章における母系制の印象が強いこともあり、「おわりに」で論じられる原初的システムや双系制が、各章で母系制に含まれない親族実践として示されたものだということを理解するのに一定の努力が求められたように感じる。それを回避する手段として、著者が「基盤」という双系的な日常実践を記述したうえで、あるいはそうした実践を記述しつつ、一部の人々に主張される母系制を提示し、そうした母系制を選好する人とそうでない人の間にどのような境界ができ、いかなるまとまりが形成されているのかという方向から議論することもできただろう。

また他者に母系的実践を働きかける行為を、親族関係をめぐるポリティクスとして位置

づけると、著者が度々「親族システム」と言及するような動的なシステムとしての家族、親族関係の描写に繋がったとも評者は考える。著者が4章でバティン・ジャングットの時代を「母系アダット原理主義」として分析した方法を他にも敷衍し、原初的な社会システムを基盤とする「助け合い」や「分かち合い」の中でも、過去に正統性を求める特殊なポリティクスを伴う実践として母系への選好を位置づけ、それによってどのような人々に優先的な助け合いが生じ、それが村内の親族集団の形成・維持や格差にどう繋がっているかを示すと、全体として動的なシステムとして人々の繋がりを把握できたかもしれない。しかしやはり、ドリアン・タワール村の母系的な語彙や実践は非常に興味深く、これらが4章と5章でまとめて提示されたことに事例を生かしたいという著者の意図を読み取ることができよう。

### おわりに

独立以降急速に変化してきたマレーシアを、オラン・アスリとして生きる人々の日常を繋がりという観点から論じる本書は、他者との関わりが人間にとって欠かせないものであることを再認識させる。生物としてのヒトは無力な状態で生まれ、他者の助けを受けて成長し、老いて死ぬまで自分以外の人と関わって生きる。あるいは、ヒトは社会関係の網の目に位置づけられ生きていくことで文化を身体化し社会的存在である人として成長していくともいえる。こうした社会関係のなかでも、より相互依存的な関係が「家族」や「親族」と呼ばれてきた。しかし家族や親族の在り様は様々で、社会や時代とともに変化してきたわけであり、これは裏を返せば、個人の自己認識も多様で時代や社会によって変化するということである。そうした一方、何等かの理想形をもとに制度が定められることもあり、人々はそのような制度の制約も受けつつ生活する。

現在多くの地域では、国家は社会保障制度によって国民の生活を支えることが期待されているが、個々人がおかれた状況や個人を取り巻く人々の関係は多様で、どこまでが家族や親族に期待されるものなのかの線引きも難しい。そうしたなか NGO との交流を通じた繋がりも生かしつつ生活するドリアンタワール村の人々の姿を本書は提示する。どれか1つの型や「法的に正しい形」を絶対視することなく、身近な人々、自らの生にとって不可欠な存在と繋がりを築いていく人々の実践に目をとめながら家族や親族について考えていく必要があることを認識させる。

### 〈参考文献〉

Benjamin, Geoffrey (1985) "In the Long Term: Three Themes in Malayan Cultural Ecology," in Karl L. Hutterer, A. Terry Rambo, and George Lovelace eds. *Cultural Values and Human Ecology in Southeast Asia*, Ann Arbor: Center for South and Southeast Asian Studies, The University of Michigan, 219-278.

- Eriksen, Hylland Thmas (2010 [1993]) *Ethnicity and Nationalism: Anthropological Perspectives*. 3rd edition. London: Pluto Press.
- Lavenda, Robert H. and Emily A. Schultz (2020) *Concepts in Cultural Anthropology 7th Edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Levi-Strauss, Claude (1969 [1949]) *The Elementary Structures of Kinship (revised edition)*, translated by James Harle Bell and John Richard von Sturmer trans, Rodney Needham ed., Boston: Beacon Press.
- Morgan, H. Lewis (1985 [1877]) *Ancient Society*, Tucson: University of Arizona Press.
- Needham, Rodney ed. (2011 [1971]) *Rethinking Kinship and Marriage*, London: Routledge.
- Parkin, Robert and Linda Ston (2004) *Kinship and Family: An Anthropological Reader*, Oxford: Blackwell Publishing.
- トッド、エマニュエル (石崎晴己監訳) (2016) 『家族システムの起源 1 ユーラシア』 上下、藤原書店。
- 日本国語大辞典第2版編集委員会 (2002) 「結婚」『日本国語大辞典』4巻 (2版)、1380、小学館。

(かわい・あや 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

2023年5月17日掲載決定